

NPO 法人

奈良21世紀フォーラム会報

2009 年新春号

年頭のご挨拶

奈良 21 世紀フォーラム理事長 森 本 公 誠

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様には新春を迎えられて、益々ご清祥のことと心からお慶び申し上げます。昨年の年頭挨拶には、暗いニュースが日常茶飯事のように続き、前年を象徴する漢字に「偽」が選ばれるほど、偽装問題に明け暮れた年だったことに触れましたが、そのような世相がいつそう加速されたのか、昨年はまさに激変の年でありました。年中行事のようになっている清水寺貫主の墨書も「変」が選ばれました。



米大統領選でオバマ氏が「チェンジ」を叫んでいたのを皮肉るかのように、アメリカに始まった金融危機はあっという間に世界中を駆けめぐり、株価は暴落、1ドル90円を割り込む過激な円高、資金繰りがつかなくなった企業のリストラ、大手・中小を問わず100年に一度といわれる大不況と、一昨年の暗澹たる気分は、いまや恐怖にも似た逼塞感となって、日本のみならず世界中に横溢しています。このたび、一挙に職を失うことになった人々の大半は、そうした恐怖心の犠牲者である気がしてなりません。過去の時代と違って、情報が瞬時に伝えられる現代だからこそ起こりえた現象なののでしょうか。

それに、政治の軽さも気になるころです。かつては貧しくとも心は太陽という言葉がまじめに通る世の中だったものが、いまや何もかもがお金の価値に換算され、お金への執着が人々の幸福感を変えてしまったのかもわかりません。お金以外のことに価値を見出し、幸福とは何かを普段から心していれば、これほどの経済的ショックを感じないで済んだかもしれません。私は思うのです。私が子供のころに経験した60有余年前の敗戦前後の激変に比べれば、このたびの「激変」はまだまだ軽微だと。

ささやかな NPO 法人「奈良 21 世紀フォーラム」であっても、このような世間の寒風を少しでも暖かくできないものか、会員の皆様ともども考えていきたいところです。そのような意味もあって、2010 年の平城遷都 1300 年事業に資すればと、一昨年末、大極殿前での朝賀の儀の復元案を県当局に提案しましたが、これは天皇崇拝を助長するとのことで不採用となりました。このことを年初に、会員の皆様にお断りしなければならないのは残念であります。大極殿という建物に魂を入れる重要な儀式と考えていることには変わりありません。今後も奈良時代の宮廷儀礼のことは、NPO 法人として学者の方も交えて研究していきたいと思っております。

従来からの事業方針は新しい企画も加えて踏襲される予定です。会員の皆様には奈良県の良さを発信する手立てとなれるように、いつそうのご指導ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

平成20年度事業の進捗状況と今後の活動

1. 「朝賀の儀」復元シナリオの作成

『東大寺に残る資料などを参考にして「大仏開眼法要」に見られる、古代国家イベントの復元を行う。あわせて、2010年秋開催予定の平城遷都1300年記念事業のメインイベント事業に協力する。』としている。

昨年10月まで、平城遷都1300年記念イベント事業に協力する方策について、事務局で種々検討を行ってきたが、昨年10月24日に平城遷都1300年事業協会と協議した結果、協会側に「朝賀の儀」をイベントに採択する計画(意志及び資金)が無いことが確認されたため、2010年秋のメインイベント事業への協力については、軌道修正を行なわざるを得ない状況にある。

今年度の事業目標である、「朝賀の儀」に基づく古代国家イベントの復元については、学術的な調査研究を行うためのチーム編成を理事長及び猪熊理事が進めており、年明けから本格的な活動が始まる見込みである。

2. 「万葉けまり」の復元

(古代の復元か再現か、万葉けまり復興の経過)

藤原鎌足ゆかりの談山神社では、春秋の好季節に「けまり祭」が開催される。この蹴鞠は京都にある蹴鞠保存会により演じられている。この蹴鞠の詳細は平安時代中頃以降の古文書に記述されている。宮中で天皇や貴族が催した蹴鞠は、鎌倉時代には上級武士の間でも盛んになり、江戸時代には一般庶民に普及した。その後一旦途絶えたが、明治になって明治天皇御下賜金により保存会が結成されて復活、以降京都御所等で年中行事として催されている。他方、蹴鞠は我が国のサッカーのルーツとしてサッカーの母国イングランドサッカーミュージアムで紹介されている。

(1) はじめに

平成7(1995)年に、談山神社けまり祭に参詣したスポーツジャーナリストでサッカーに造詣の深い賀川 浩氏は、同行した元奈良県サッカー協会理事 倉井三郎氏に「現存する平安時代から京都に残る公家の蹴鞠とは別に、我が国最古の宮都が営まれた奈良飛鳥の地で行われたとされる「打毬」を創作、復元しては」と提言を受ける。(注：中国の史記によれば、蹴鞠は6世紀始めに行われていて7世紀になり東アジアに伝えられ、7世紀始めには日本にも伝えられていた。日本での蹴鞠の初見は「日本書紀」の皇極3年(644年)正月条の記述である。法興寺(飛鳥寺)の西側にあった槻樹広場で中大兄皇子は蹴鞠に興じていて鞠を蹴ったところ靴が脱げ落ち、中臣鎌足はすばやく靴を拾い上げ跪いて奉った。この出会いを契機に二人は親しくなり大化改新に繋がるエピソードは良く知られている。)

平成9(1997)年に、談山神社けまり祭に東京大学教授 浅見俊雄氏(日本サッカー協会理事)、東京大学名誉教授 渡辺 融氏(蹴鞠研究の権威者)、倉井三郎氏、福嶋重博奈良県サッカー協会理事長が参詣した際、談山神社宮司 川南 勝氏を交えて古代蹴鞠創作に向けた研究会を持つことになった。渡辺先生は「京都の平安蹴鞠の他、信州上田、四国金比羅でも行われているので、奈良から元祖蹴鞠(?)を発信しても良いのではないか」との意見であった。

平成12(2002)年に、当フォーラム福嶋重博監事から、古代の新羅と倭国(日本)において蹴鞠が盛んだったことや、飛鳥寺西側にあった槻樹広場は国家的な儀礼行事が行わ

